

郡山城とその周辺

大納言塚 豊臣秀長のこと

本能寺の変から4年後の1586年4月のこと、九州の大友宗麟が、天下平定目前の豊臣秀吉を大坂城に訪ねた。その時、応対した弟の秀長の言葉が国本に送った宗麟の手紙に残っている。

「何事も何事もこのようであるから心安くなされ、うちうちのことは利休に、おおよけのことはこの小一郎に申されよ」と、秀長は言ったというのである。

豊臣秀長、大和、紀伊、河内、和泉の112万石の太守となり、「権大納言」の地位に上った人物で、兄の秀吉、あるいは徳川家康と比肩しうる人物だが、その実像はほとんど伝わっていない。

豊臣政権は史上まれな急成長政権で、本能寺の時には織田家の武将に過ぎなかった秀吉が、4年後のこの時期には天下人に成りあがっていた。柴田勝家を滅ぼしたあとは、ほとんど戦争らしい戦争はせず、全国の大名を従えたが、おそらくそこには秀長の役割が大きかったはずだ。秀長を偉大なる補佐役と称したのは堺屋太一氏で、大河ドラマで描かれる秀長も、戦国武将には珍しい温厚な人柄というイメージで描かれるが、その通りだとすると、それこそが豊臣政権の成立に不可欠だったのではないか。

ただ、同時代の多門院日記は必ずしも郡山城主であった秀長をよく書いてはいない。秀長が死んだときの記事で、「金子五万六千余枚、銀子は2間四方の部屋に満杯になる程の金銀が備蓄されていた」という。要するに、秀長の利財ぶりを言っているのだが、大和の旧勢力を潰して、その富を郡山に移した新しい権力者を興福寺がよく書かないのは当然だろう。



秀長の正室はお藤という。元は法華寺の尼だった女性で、秀長の養子の秀保に嫁ぐことになる菊を生んだ。これには異説があってお藤は側室で、法華寺に立ち寄った秀長が彼女を見初め、郡山城に連れ帰り一夜で生ませた子が菊だという。お藤は秀長の死後、法華寺で元の尼に戻ったといわれるが、彼女はそこで静かに秀長の菩提を弔ったのであろうか。

秀長の死は1591年。大納言塚はその秀長の墓所で、江戸時代の中頃に菩提寺の春岳院の僧と、郡山の町衆によって荒廃されていた墓所が修復された。五輪塔はその時のものである。

左の肖像は、没後5年の秀長の法要の時のものといわれるからお藤もお菊も見ているはずである。少しやつれているが、この実直そうな肖像は、あるいは秀長の実像に近いのかもしれない。

永慶寺 やなぎさわやすのぶ 柳澤保申のこと

黄檗宗の寺で、1724年に甲府から国替えで郡山に来た柳澤家の菩提寺。元は甲府にあったが国替えの時に移された。今に残る山門は郡山の南門を移築したもので、郡山城の唯一の遺構。

永慶寺の墓所には柳澤の関係者の墓が並んでいるが、歴代藩主でここに墓があるのは6代目の最後の藩主・保申公だけで、初代保里公から5代藩主までの藩主は東京の月桂寺にある。

保申公は1846年生まれ、三歳にして父保興公の急死で家督を次いだ。以後22歳で幕末を迎えるまで藩主であったが、天誅組の変で十津川方面に軍を率いて出陣するなど、唯一の戦闘に望んだ藩主だ。



明治になって私人となったが、郡山と柳澤の旧藩士たちのために尽くした。その一つに奈良で最初の官制中学として創設された郡山中学（現郡山高校）がある。奈良出身の偉人が多く学んだ郡山中学が、旧藩主の館だった二の丸御殿の跡地に創設されるのは明治26年のこと、それを見届けて最後の藩主は、49歳の生涯を終え永慶寺に葬られた。向かいの桜花グラウンドは、今も郡山高校野球部のグラウンドである。

郡山城小史

筒井順慶 郡山城は、西の京丘陵の南端部に築かれた平山城。最初にこの地に城を構えたのは、織田信長の支援で大和国主となった筒井順慶で、この場所を勧めたのは明智光秀だったといわれる。

順慶の郡山入部は1580年で本能寺の変の2年前、多門院日記の記事に『郡山天守上げのため人夫出』とあるので、順慶の時代に既に天守閣があったようだが、その場所も規模も定かでない。

豊臣秀長 現存する郡山城を築いたのは豊臣秀長公である。秀長が114万石という破格の石高で郡山の領主となるのは1585年、紀州と四国が平定され、豊臣の天下が確立された頃だ。多門院日記に、『1587年 奈良の水谷川の大石大小400個を運ぶ。 88年 奈良中家並に対し五郎太郎石(小石)20荷づつ供出させる。 89年 春日社山内で大小の石をことごとく運ぶ』などの記事が見え、急ピッチで郡山城の建設が進められたのが分かる。

しかし秀長は1591年に没し、そのあと養子の秀保(豊臣秀次の弟)が家督を継ぎ、1595年に城主になった豊臣五奉行の一人・増田長盛が外堀を完成して郡山城、城下町の総構えを完成する。

秀長の築城から10年後、関が原の4年前のことである。

関が原 関が原は、豊臣の城だった郡山城の運命を変えた。敗戦により天守や櫓は取り壊され、大手門や鉄門ともに、関が原の時に焼失した伏見城の再建のために運び去られた。最近の研究では天守はそのまま二条城に移設され、その後淀城に転用されたといわれるが、いずれにしても、郡山城は破壊され、建物はそのほとんどが、転用するために運び去られたことは確かである。

松平忠明 その郡山城を復元するのは、大阪夏の陣の功績で1620年に12万石で郡山城主になる松平忠明で、家康の孫であった忠明によって、江戸時代の郡山城の姿が築かれることになる。

二の丸に藩主の館と政庁を設け藩政の中心とし、大手門や鉄門といった重要な門を廃城となった伏見城から再度移設し、重臣たちの屋敷の五軒屋敷が造られたのもこの時代といわれる。天守は石垣のまま捨て置かれたものの、郡山城はその後に入った本多、柳澤などの大名に継承され、幕末まで続く。

明治から昭和へ 明治の徳川幕藩体制の崩壊は、郡山城の姿を再び変えた。明治2年の破城令で大手門や鉄門などの諸門は取り壊され、売却される。二の丸御殿は取り壊され、最後の藩主柳澤保信の努力で郡山中学(現郡山高校)に生まれ変わった。その代わり天守台は市民に開放され、天守台の前に柳澤の藩祖柳澤吉保を祀る柳澤神社が置かれ、石垣の上には歴代の柳澤の藩主を祀る祖霊社が置かれた。

そして昭和の終りに、大手門と追手東櫓、あるいは向櫓が観光資源として台湾檜で再建され、20年ほど前には市民団体の手で、天守閣が天守台に再現されるが、それは発砲スチロール製だったのである。

発掘 今に残る郡山城の石垣は、野面積みといわれる自然石を積み上げた織豊期の築城の代表的な遺構といえる。ただ、豊臣の時代に天守が建設されたとしても10年に満たない期間で、本当に天守が存在したのか疑問視されることもあった。ところが、平成25年から始まった石垣の補修事業に伴う天守台の発掘調査で、天守台の礎石が良好な形で残っていることが分かった。また付櫓の入り口から天守の地下への通路も確認された。さらに豊臣一門の城に共通の金箔も発見された。確かに16世紀の終りに、金箔に輝く五層の天守が聳えていたのである。

